

健康の視点から掃除を見直す活動を通して、 快適な住まい方に関する「課題を解決する力」を身に付ける学習

～6年「クリーン大作戦」の実践を通して～

秋山玲奈

I はじめに

全体研究の2年次テーマ「深い学びを実現する学習づくり」を受け、家庭科の2年次研究では、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせた授業づくりについて研究を進めた。見方・考え方は、次期学習指導要領において、「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」等の視点とされている。

家庭科では、この「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、実生活と関連を図った問題解決的な学習を効果的に取り入れ、身近な生活の課題を解決する力を育む指導を充実させることが求められている。

家庭科の授業においては、生きる上で役立つ知識や技能を体験的に身に付けることを通して、児童が主体的に学習に取り組む授業改善が進んでいる。一方で、家族の一員として協力することや家族や地域の人々との関わり、家庭における主体的な実践及び社会への参画などが十分でないなどの問題点も出ている。以上の現状を踏まえると、日常生活の中から問題をみいだして課題を設定し、解決に向けて自分なりに考え、計画を立てて実践し、その結果を評価・改善し、更に家庭や地域で実践するなどを一連の過程とした題材構成を考えていく必要がある。

そこで、家庭科における2年次研究のテーマを「実践的・体験的な活動を通して、『課題を解決する力』を身に付ける家庭科の学習」と設定した。「課題を解決する」とは、生活の課題を設定し、知識や技能を活用して解決方法を検討することである。生活の営みに係る視点を課題解決の過程の中心として、家庭や地域に積極的に関わる態度を育てたいと考えた。

II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童の「課題を解決する力」を高めるための効果的な手立てについて明らかにすることである。そのために、以下の3つの視点から授業実践「クリーン大作戦」における児童の様子について分析する。

- ①基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける実践的・体験的な活動の充実
- ②「課題を解決する力」を身に付ける言語活動の充実
- ③達成感や満足感を味わう評価

なお、研究の対象とした題材の概要は以下の通りである。

1 題材名 「クリーン大作戦」

2 題材の目標

住まい方に関心を持ち、汚れの種類に合った掃除の仕方を考えて、工夫して掃除ができる。

3 題材の概要

学校の清掃を見直す活動を通して、健康で快適な住まい方についての理解を深め、家庭生活を快適にする工夫を考えようとする態度の育成を目指して指導した。掃除と健康との関連に関心が低いという児童の実態から、特に、汚れ調べや試しの掃除などの実践的・体験的活動の充実に重点を置いた。実践的・体験的活動と言語活動を通して考えたり表現したりする活動を繰り返した。



知識を活用して考えを発表している児童の姿

Ⅲ 結果と考察

1 基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける実践的・体験的な活動の充実

(1) 結果

本実践では、児童が基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得するために、実践的・体験的な活動を量的に充実させた。具体的には、掃除を振り返る活動において、①汚れ調べ（資料1）、②試しの掃除、③VTR視聴（写真1）を行った。

汚れ調べでは、掃除直後の汚れの多さに気付かせることで、掃除の仕方に関する問題点が明らかになると考えた。児童は、「階段掃除では、気付かないところにすごい汚れがあり、思ったよりも汚いと思いました。手すりの下や隅の方などの目立たない場所には、目がいていないと感じました。」「トイレの汚れを調べてみると、天井や床に近いところにほこりがたくさんありました。」など、汚れのたまりやすい場所や掃除の見落とし箇所気付くことができた。

試しの掃除では、掃除の仕方に関する問題があることを意識してから掃除道具の扱い方を試すことで、学習課題に対する必要感が生まれ、知識・技能を確実に身に付けられるのではないかと考えた。児童は、「階段で試しの掃除をして、ほうきと自在ぼうきとモップの違いがわかった。ほうきは、毛のすきまがあってほこりを逃しやすく、角のごみを取りにくかった。自在ぼうきは毛先のすきまがないので、細かいごみも残さずはくことができるし、何度かはくと角のごみも取れた。モップは毛先にほこりを静電気などで巻き付けて取れるので、踊り場ではごみを取りやすかった。」などと話し合いをし、道具の種類による扱い方の違いに気付いた。

VTR視聴では、実際に掃除をしている姿を見て振り返ることで、掃除の仕方や手順を客観的に振り返ることができるのではないかと考えた。児童は、「汚れの種類によって掃除道具を変えないときれいに掃除できないので、適切な道具の使い方が必要だと思った。」「動画を見て、道具の使い方や役割分担に関する問題点を見つけてどう改善したらよいかはっきりさせることができた。」など、知識を活用する様子が見られた。



資料1 児童が作成した掲示物「階段の汚れ調べ」



写真1 VTR視聴を通して掃除の仕方を見直す児童の姿

(2) 考察

実践的・体験的活動を量的に充実させたことは、児童の基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるために有効だったと考える。

このことは、汚れ調べでの児童の発言が、汚れが残りやすい場所や、隅々まで汚れを除く必要があることなどの掃除の基本的な知識を身に付けた内容であること、試しの掃除での児童の発言が、汚れを取り除く手段として掃除道具の扱い方を技能として身に付けた内容であることから判断できる。VTR視聴での児童の発言が、身に付けた知識や技能を活用して、掃除の仕方や手順の改善案を述べていることから判断できる。これらの発言が見られたのは、実践的・体験的な活動の充実が児童の基礎的・基本的な技能を身に付ける手立てとして有効に働いたからであると考えられる。

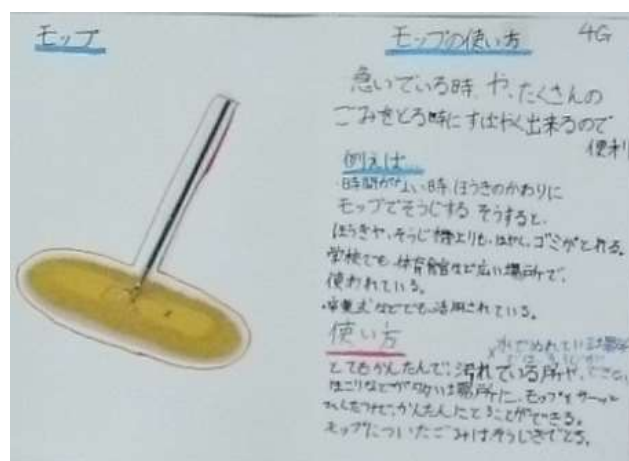
2 「課題を解決する力」を身に付ける言語活動の充実

(1) 結果

本実践では、「課題を解決する力」を身に付ける言語活動として、考えたことを言葉で説明し、積み上げていく活動を学習に位置付けた。学習における気付きや学びの成果を記録するためにワークシートを活用した。ワークシートを活用した学習では、まず、児童に普段活用している掃除道具についての説明を書かせた(資料2)。その後、グループで話し合いをさせ、試しの掃除をさせてから掃除道具の説明を掲示物としてまとめさせた(資料3)。モップについて、資料2では「ゴミがある所をいっせいに取る」と記述している。資料3では「たくさんのごみをとる時にすばやくできる」(掃除面積と時間)、「体育館などの広い場所で使われている」(掃除場所)「ほこりなどが多い場所で簡単にとることができる」(取りやすい汚れの種類)と記述している。



資料2 ワークシートで児童が個人で記録した道具の説明



資料3 グループでの話し合いと試しの掃除を終えた後に児童が作成した道具の説明

(2) 考察

資料2と資料3を比較すると、児童は話し合いをしたことによって、「掃除の仕方を見直す」という課題について、より具体的かつ、端的に解決策を考えることができている。これは、話し合い後の児童の記述(資料3)に、掃除面積や時間、適した場所、取りやすい汚れの種類など、道具の具体的な扱い方などの経験により身に付けた知識や技能が加わっていることから判断できる。

これは、書いたり話したりするなどの言語活動を充実させたことによって、児童の表現力が高まり、その結果、課題を解決する力が身に付いたからだと考えられる。このことから、試し掃除などの活動を重ねるだけでなく、考えたことを、言語を活用して説明することは、課題を解決する力を身に付けるために有効な手段だと考える。

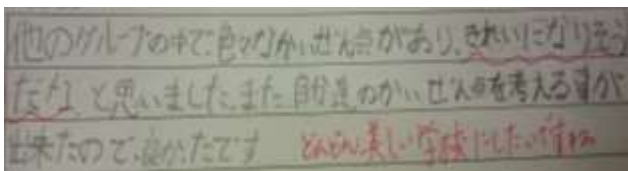
一方で、説明では「さーっとはく」などの擬音語や擬態語を用いた説明も活用されていた。国語科など他教科とも連携を図り、説明するための語彙や表現を広げていく必要がある。

3 達成感や満足感を味わう評価

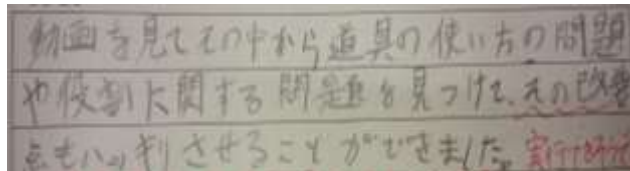
(1) 結果

本実践では、1単位時間での成長を実感し、次の課題を明確にするために毎時間記述による自己評価を行った。振り返りで、A児(資料4)は、「他のグループの中で色々な改善点があり、きれいになりそうだなと思いました。また、自分達の改善点を考えることができたのでよかったです。」、B児(資料5)は、「動画を見て、その中から道具の使い方の問題や役割に関する問題を見つけて、その改善点もはっきりさせることができました。」と記述した。掃除の見直しにより、学校がきれいになりそうだという期待や、掃除の問題点を具体的に見付けられたことへの満足感及び達成感を実感する

ような記述が見られた。



資料4 A児が実際に記述した振り返り



資料5 B児が実際に記述した振り返り

(2) 考察

本実践において、課題を解決し、目標を達成できたという視点での自己評価を積み重ねたことは、児童が達成感や満足感を味わうために有効であったと考える。

このことは、A児及びB児の記述において、自分たちの問題点に気づき、改善点を明確にしたことに対して「よかった」などの前向きな気持ちが表現されていることから判断できる。一般的に、自分の問題点や欠点を探るときは、マイナスのイメージを感じるものである。しかしA児は「良かった」という言葉で表現している。これは、児童が掃除の課題を解決することに対して、達成感や充実感を感じていたからだと考えられる。またB児も学校がきれいになることを期待する気持ちが感じられる。健康を視点として題材を展開した結果、掃除の改善の必要性に気づき、健康を保つために掃除を工夫したいという意欲が向上し、達成感や充実感につながったと推察される。

IV まとめ

本研究では、児童の「課題を解決する力」を高める学習を目指して、「基礎的・基本的な知識及び技能を身に付ける実践的・体験的な活動の充実」「『課題を解決する力』を身に付ける言語活動の充実」「達成感や満足感を味わう評価」の3点の手立ての効果を検証した。以下に、成果と課題を示す。

1 成果

- 実践的・体験的な活動を充実させ、体験と思考を繰り返したことによって、課題を解決するために必要な知識及び技能を確実に身に付けることができた。
- ワークシートや話し合いなどの言語活動を充実させたことによって、基礎的・基本的な知識及び技能を活用する場面が増え、課題を解決する力の高まりにつながった。
- 1単位時間の学習の振り返りを積み重ねたことで、児童は課題を解決することへの達成感や満足感を味わうことができた。

2 課題

- 家庭での実践について、課題発見は積極的だったが、実践は受け身になる児童が多かった。生活時間との関わりも考慮し、積極的に実践する意欲を高める指導について工夫する必要がある。
- 家庭での実践だけでなく、地域の一員としての自分の役割も自覚させ、共生をテーマにした学習展開、学習活動に向けて題材の構成を吟味する必要がある。

V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 東洋館出版社 平成20年8月
- 小学校学習指導要領解説 家庭編 文部科学省 東洋館出版社 平成29年7月
- 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について（答申） 中央教育審議会 平成28年12月21日
- 初等教育資料No.969 「家庭科における資質・能力の育成に向けた授業づくり」 文部科学省 東洋館出版社 平成30年7月号
- 早わかり&実践新学習指導要領解説 小学校家庭 開隆堂 平成29年7月

家庭科部会

司会者 工藤 知里 (旭川市立東栄小学校教諭)
助言者 内村めぐみ (旭川市立雨紛小学校校長)
岡田みゆき (北海道教育大学旭川校教授)

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

実践的・体験的活動の充実について (VTRや掲示物の活用)

<授業者から>

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるために、実践的・体験的な活動を量的に充実させた。実態把握をさせるための汚れ調べを行い、結果をまとめて掲示物を児童に作成させた。日常の掃除を見直すために、掃除場所ごとのVTRを活用させた。また、掃除道具の使い方を体験的に身に付けさせるために、段階で試しの掃除を行った。実践的・体験的な活動の充実を優先させるために、本時で計画した掃除手順の実践の場としては、掃除時間を考えているが、学習の中での実践も考えられたので検討が必要だった。

<参観者から>

- 実際の掃除時間の様子を見て話し合う活動がよかった。掃除時間の印象で話していないので、具体的かつ客観的な話し合いになっていた。
- 学習の過程が子供の字の掲示物として残されており、それらを見合うことで子供たちが効果的に学習を行っていた。掲示物を活用することで、学習の中で掃除等の体験を行わなくてもよかった。
- 子供たちに一番考えさせたい部分が、分かりにくかった。手順を考えさせたかったのか、掃除の仕方を考えさせたかったのか、掃除の見直しをさせたかったのか、全てなのか。手順のみでも良かったのかかもしれない。



家庭科部会

「課題を解決する力」を身に付ける言語活動の充実について

- 時間がなく見られなかったが、プロジェクトシートを活用して家庭における課題や実践の計画をしている姿を見たかった。シートを活用して学習を積み重ねて記録していることはよい取組みだと思うので、是非続けてほしい。
- 子供たちのグループにおける話し合いの様子がよかった。教師による課題の提示や話し合う視点が明確に示されて板書されていたので、子供たちの話し合いは深いものになっていた。
- 話し合いをした結果を発表した際に、時間がなく発表会のようになってしまったことが残念だった。方法論を示すだけでなく、発表したことの根拠や理由を教師がつかないでいくことによって、課題解決の力が高まるのではないか。

授業の感想・その他

- 掃除道具について、家庭と学校で扱うものに違いがあるが、新しいものだけでなく、「はたき」などの古き良き道具の活用も必要であると掲示を見て感じた。
- 時代によって用いる道具が変わっても、掃除の本質は変わらないので、住まいを快適にするという掃除の伝統を受け継ぐことの大切さも伝えていきたい。

II 助言者からの講評

(1) 内村 めぐみ 校長先生から

附属小学校の学習環境は家庭科だけでなく複数の学習において iPad を活用するなどの ICT 機器の活用が行われており、児童も使いこなしていた。恵まれた環境の中で、児童は特別教室での教科担任による家庭科の学習を重ねており、中学校での学習環境を見据えた教育を早期より行っているところが素晴らしい。また、家庭科の授業を公開した学級の子供たちは、2時間連続の公開となったが高い集中力があり、日頃の指導の賜物であると考えられた。家庭科においては、次期学習指導要領においても重視されている「課題をもって学習に臨む」という点において、研究のねらいに定められており、素晴らしい学習が展開されている。



今年度の題材である「クリーン大作戦」においては、自分の部屋を掃除することについて事前調査で質問していたが、自分の部屋がない児童もいることが予想されるため、公立の学校で本実践を行う場合には、家庭環境に十分配慮しながら進めていく必要がある。本実践で使用していたワークシートを、子供たちが活用することによって、効果的な学習を行うことができていた。

これからの家庭科教育の課題でもあるが、子供たちの家庭生活の場に、家庭科の学習で学んだことを返していくこと、そして、子供たちが家庭の仕事を日常的に実践できるようになるために、学習を積み重ねていくことが大切である。

(2) 岡田 みゆき 教授から

家庭科教育に求められているものと、附属の教育に求められているものがある。家庭科教育では、次期学習指導要領において、生活の営みに係る見方・考え方である「健康」や「快適」などの価値が示された。また、人と助け合うことなどを通して、集団の中で共に生きる力を育むことが求められている。これらを受けて、附属の教育では、1年次は自立、2年次である本年度は他と学び合うことを軸とした課題解決につながる力の育成、3年次に共生を柱として研究を進めている。家庭科教育では、共生の態度を身に付けることが最も重要であると考えられる。



本時では、掃除における道具や手順を確認するだけでなく、掃除の仕方において役割分担をすることの重要性を子供たちが自らの考えで確認し合うことにおいて、共生の考え方が活用されていた。これは、研究の最終年度にもつながる考え方であり、家庭科教育としての最終地点への見通しがなされているよい授業であった。授業担当者が小学校から高等学校までの全学年を指導していたことが生かされた家庭科の実践及び授業の構成となっていたと考えられる。それぞれの発達段階における目的だけでなく、家庭科教育全体を見通して学習を展開していくことで、子供たちが自立した生活を主体的に営むことができると考えられる。将来を見据えた効果的な実践を積み重ねていきたい。